

論文

ドイツ語における勧誘表現について

鈴木 康 志

要 旨

勧誘表現 (Adhortativ) は、1 人称 (話し手) を含んだ命令形、あるいは話し手自身を含んだ、聞き手に対する勧誘や提案を表す。ドイツ語では独自の形態はなく、接続法 I 式、話法の助動詞 *wollen*、使役動詞 *lassen* を用いる。例えば「行こう (か) !」は *Gehen wir!*, *Wir wollen gehen!*, *Lass uns gehen!* のようになる。

このような勧誘表現はすでにゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語にみられるが、*Gehen wir!* タイプが一般的で、*wir* のような代名詞がない場合が多い。初期新高ドイツ語 (1350~1650 年) では *~en wir!* タイプは追いやられ、*Lass(t) uns gehen!* タイプが主流になる。そして 18 世紀からはまた 3 つのタイプが、頻度は異なりながらも用いられるようになる。*~en wir!* タイプの問題点は、目的語や副文など、他の文肢が文頭に出た場合、勧誘表現であるのかわからなくなること、*wir wollen~!* タイプは、*wollen* が *werden* と書き換えられるような未来的な用法など、勧誘表現か判断するのがむずかしい場合があることである。また *lass(t) uns~!* タイプは、1. 再帰動詞の場合は再帰代名詞の重なりで居心地がわるいこと、2. *gehen lassen* など *lassen* と結びついた動詞に使えないこと、3. 18 世紀に敬称の呼称代名詞が *Ihr* から *Sie* に移ったことなどで、現代では他のタイプに対して使用頻度が低くなっている。

Ulvestad (1985) などの研究によれば、現代は 3 つの形式の中で *~en wir!* タイプが最も多く使用されている。またドイツ語においても、*joint action*

以外に、勧誘表現に聞き手のみの要求や、話し手だけに要求するような例がある。また100例あまりの調査に過ぎないが、勧誘表現には *gehen*, *sehen*, *fahren*, *essen* などの動詞が多用されること、条件文などを形成することがあることなどにも触れた。

キーワード：勧誘表現 (Adhortativ), 1人称複数形命令文 (~en wir!, wir wollen~!, lass(t) uns~! (let us~!)), joint imperative

I. 勧誘表現の歴史的な実例

勧誘表現 (Adhortativ) は、一般に1人称 (話し手) を含んだ命令形、より詳しく述べれば、話し手自身を含んだ、聞き手に対する勧誘や提案を表す。ドイツ語では独自の形態はなく、接続法 I 式、語法の助動詞 *wollen*, 使役動詞 *lassen* を用いる。例えば「行こう(か)！」は **Gehen wir!**, **Wir wollen gehen!**, **Lass uns gehen!** のようになる。

このような勧誘表現はゲルマン語ではすでにゴート語にみられる。ゴート語の1人称複数形の命令形は、直説法現在1人称複数形 (-am) に対応する。例えば4世紀の *Wulfila* (ヴルフィラ) のゴート語訳聖書のヨハネによる福音書の11の7をみてみよう¹⁾。

- (1) **gaggam** (gehen wir!) in Iudaian aftra. (千種 (1989: 96))

Gehen wir wieder nach Judäa.

もう一度ユダヤに行こう。

特色は、現代語の *gehen wir* の *wir* のような代名詞がない点で、これは古高ドイツ語や中高ドイツ語でも基本的に同じである。古高ドイツ語 (750~1050年) では、オトフリート・フォン・ヴァイセンブルクの『福音書』(9世紀) の例でみてみよう。古高ドイツ語でも勧誘表現は直説法1人称複数形 (-mês, -en) と同じである。大抵は代名詞なし、特に -mês という語尾が付いた場合はそうである²⁾。

- (2) **Ilemes nu** âlle zi themo kâstelle. (Otfrid I, 13, 3, hrsg. von Erdmann (1973: 32))

Wohlan! nun **lasset eilen uns** hinan zu jener hohen Burg. (Johann Kelle, S.37)

さあ、急ごう、あの高い城へ。

中高ドイツ語 (1050~1350年) でも通常は代名詞がないが、*wir* が現れる場合もある。ここでは『ニーベルンゲンの歌』(1200年頃) を現代ドイツ語訳とともにみてみよう³⁾。

- (3) nu **rîten** <wir> vreuden âne heim in unser lant. (*Das Nibelungenlied* 1034, S.318)

So **reiten wir** ohne jede Freude heim in unser Land. (Neuhochdeutsch, S.319)

さあ、なんの喜びもなしに故郷に帰ろう。

- (4) nu **rûme** ouch **wir** den tan. (*Das Nibelungenlied* 887, S.276)

Nun **sollen** auch **wir** den Wald **verlassen!** (Neuhochdeutsch, S.277)

さあ、私たちが森を出ることにしよう。

例文(3)で wir は省略されているが、例文(4)では wir が現れている。なお、中高ドイツ語では、wir の前では定形は -en の n を失うことが多く rûme となっている。また nu は命令形を導く働きもある副詞である。

初期新高ドイツ語 (1350~1650年) に関してはルター訳の『聖書』(16世紀) からみてみよう。中高ドイツ語にみられた gehen wir!, reiten wir! という勧誘表現は、初期新高ドイツ語ではほとんど用いられず、lass(t) uns~! という表現が頻繁に用いられるようになる⁴⁾。ルター訳『聖書』を二つの現代語訳とともに読むと、「マタイの福音書」に2つ、「マルコの福音書」に6つ、「ルカの福音書」に5つ、「ヨハネの福音書」に5つ lass(t) uns~! の勧誘表現が現れる⁵⁾。各福音書から一つづつ、2つの現代語訳とともに引用してみよう。最初がルターのドイツ語、2つ目がルターの現代語訳、3つ目はカトリック教会の統一訳である。

- (5) Halt **las** sehen ob Elias kome vud jm helffe. (*Matheus* 27. 49., S.94)

Halt, **lass** sehen, ob Elia komme und ihm helfe! (S.40)

Lass doch, **wir wollen** sehen, ob Elija kommt und ihm hilft. (S.1114)

待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう。

- (6) Kompt **lasst** vns jn tödten. (*Markus* 12. 7., S.132)

Kommt, **lasst uns** ihn töten. (S.58)

Auf, **wir wollen** ihn töten. (S.1132)

さあ、彼を殺そう。

- (7) **Lasset** vns drey Hütten machen. (*Lukas* 9. 33, S.182.)

Lasst uns drei Hütten bauen. (S.82)

Wir wollen drei Hütten bauen. (S.1157)

3つの小屋を建てよう。

- (8) Aber **lasset** vus zu jm ziehen. (*Johannes* 11, 15, S.270)

Aber **lasst uns** zu ihm gehen! (S.122)

Doch **wir wollen** zu ihm gehen. (S.1198)

彼のところに行こう。

ルターの現代語訳が lass(t) uns~! で同じように訳されているのに対して、統一訳の方は wir wollen~! で訳されている。このタイプは比較的新しい勧誘表現である。最後に、新高ドイツ語での用法については、20世紀の文学作品、トーマス・マンの『ブデンブローク家の人々』

から様々なタイプの例をみてみよう。

- (9) ... fassen Sie sich, ich beschwöre Sie, und **gehen wir!** (*Buddenbrooks*, S.25)

しっかりして、お願い、さあ行きましょう。

- (10) nun **wollen wir** nur nicht anfangen zu prahlen. (*Buddenbrooks*, S.117)

あまり自慢しないことにしよう。

- (11) Aber **laß uns** zur Ruhe gehen, ... (*Buddenbrooks*, S.79)

さあ、休みましょうか。

- (12) **Lassen Sie uns** immer das Beste hoffen! (*Buddenbrooks*, S.563)

いつも最善を期待することにしましょう。

上記の例文からも伺えるように、ドイツ語における勧誘表現の形式は *Gehen wir!* (～en wir!), *Lass(t) uns gehen!* (*lass(t) uns～!*), *Wir wollen gehen!* (*wir wollen～!*) の3つになる⁶⁾。このようなドイツ語の勧誘表現に関して、筆者の知る限り、わが国では論文はもとより、文法書などにも詳しい記述はない。そこで、Kurrelmeyer (1900: 58ff.), Behaghel (1924: 229f.), Ebert u. a. (1993: 419f.), とりわけ Erben (1961) に基づいて、ドイツ語の勧誘表現の歴史的な経緯と問題点を記してみよう⁷⁾。

II. 勧誘表現の3つのタイプの歴史的な経緯と問題点

1. タイプ1 (*Gehen wir!* →～en wir! タイプ)

すでに見たように、このタイプは古高ドイツ語と中高ドイツ語の勧誘表現の形式である。このタイプは、Kurrelmeyer (1900: 59f.) が述べているように、ルターの初期新高ドイツ語の時代に、他の二つのタイプによって使用が制限されてしまう。ただし Erben (1961: 461) が例をあげているように、まったく使われなかった訳ではない。18世紀にこのタイプは幾人かのスイスの作家によって再び使われ始めるが、その使用は非難され、Adelung のような文法家によっても正しくない(標準語的でない)とされた。しかしながらこの表現は、ヴィーラント、クリンガー、レンツさらにゲーテ、シラーのような作家が使用し、この勧誘の簡潔な表現は少なくとも18世紀から再び広まり、書き言葉でも頻繁に用いられるようになった。現在では日常言語でも、書き言葉でも非常によく用いられている。

しかしながら、目的語や他の文肢でも、それが文頭に出たりすると、このタイプでは勧誘表現であるのかわからなくなる。例えば

- (13) *Diesen Koffer nehmen wir zuerst!*

このカバンを私たちは最初にとります。

(14) Solange wir hier auf Erden sind, beten wir füreinander.

ここ地上にいる限り、私たちは互いのことを祈る。

このタイプの勧誘表現は主語と動詞を倒置することによって表される。したがって例文(13)のように目的語が文頭に来たり、例文(14)のように副文が主文の前に来ると、必ずしも勧誘的な要求とは取れなくなってしまう。それを明確にするには **wollen** を使って書き換える必要がある⁸⁾。例えば

(15) Solange wir hier auf Erden sind, **wollen wir** füreinander beten!

ここ地上にいる限り、互いのことを祈りあおう。((13)~(15) Erben (1961: 462))

また、このタイプは疑問文の場合、ただイントネーションによってのみ勧誘表現と区別されることになる。(Gehen wir!?) ここにこのタイプの使用上の問題点がある。

2. タイプ2 (Lass(t) uns gehen! → lass(t) uns~! タイプ)

タイプ2は、タイプ1 (~en wir!) の使用を一時追いやった。それは多かれ少なかれ他のゲルマン語においてもいえる。ドイツ語の **Lass uns gehen!** に英語の **Let us go!**、デンマーク語の **Lad os gaa!**、スウェーデン語の **Låt(om) oss gå!**、オランダ語の **Laten wij** (古 **Laat ons**) **gaan!** が対応する。スウェーデン語など北欧の言語では、この構造は低地ドイツ語、とりわけルターのドイツ語の影響があるとされる。英語はドイツ語と同様にすでに14世紀から使われているが、オランダ語にはもっと早い使用例があり、13世紀である。ドイツ語にとって重要なものは、すでに13世紀に見られる古いオランダ語の勧誘表現 (**laat ons**) である。この影響のもと、低地ドイツ語でもこの書き換えが現れ、すでに14世紀には高地ドイツ語においても現れる。英語も同様に中世オランダ語の影響下にあるかはわからない。ただし、より古いドイツ語にも例証があり、このタイプの多元発生の可能性ももちろん否定することはできない。

このタイプはルターなど初期新高ドイツ語の時代にはよく使われたが、しだいにタイプ1と次に述べるタイプ3に追いやられるようになる。このタイプが現代の標準語において使用頻度が低くなる理由を Erben (1961: 466) はいくつかあげている。

1. 勧誘表現 **Laßt uns gehen!** (行こう!) と願いの表現 **Laßt zu, daß wir gehen!** (私たちを行かせて!) との誤解が生じること。
2. 再帰動詞の勧誘表現が居心地が悪く、うつくしくないこと。
Laßt uns uns unterhalten! (歓談しよう!)
4. **lassen** と結びついた動詞、例えば **bleiben lassen**, **fallen lassen**, **gehen lassen** などの勧誘表現には使えない。しかもこのような動詞は現代ドイツ語で増えている。
5. 決定的なものは17, 18世紀における呼称代名詞の **Ihr** から **Sie** への変化⁹⁾。この後は

laßt uns~! の定式は古めかしいものと思われるようになり, Kinder, laßt uns gehen! (皆さん, 行きましょう) のように, 親しみを込めた者たちに話しかけるような場合に限られるようになる。

後でみるように, 現代では lass uns~! タイプの使用頻度が3つの中で最も低い。

3. タイプ3 (Wir wollen gehen! → wir wollen~! タイプ)

このタイプは現代のドイツ語でよく使われる形式である。古い例証は14世紀のオランダ, 低地ドイツ, 中部ドイツ語で, 15世紀の後半からこの形式は南部ドイツ語にも広まった。16世紀のルターにおいてはまだ lass(t) uns~! タイプが, wir wollen~! タイプより多いが, 以下の例のように wollen も使われている。

(16) **Wyr wollen gehen und vnserm Got opffern!** (2. Mos. 5, 8 Erben (1961: 468))

行つて, 私たちの神に犠牲をささげよう。

しかし17世紀になるとグリンメルスハウゼンの『阿呆物語』などで用いられるようになり, 18, 19世紀には~en wir! タイプとともによく用いられるものとなる。ただ, このタイプにも問題点がある。以下の例でみてみよう。

(17) **Das wollen wir doch mal sehen, wenn meine Wenigkeit die [Aale] prima zubereitet mit allem Drum und Dran.** (G. Grass: *Die Blechtrommel*)

不肖私が一切合財使つて極上のものを作りあげれば, そのこともじきにわかるでしょう。

(18) Na, **wir wollen** mal sehen.

まあちょっとみてみよう。(17), (18) Ulvestad (1985: 526) より)

例文(17)では wollen が werden と置き換えられるような未来的な用法であり, また例文(18)は話し手のかわすような態度を表す場合などにも使われ, しばしば勧誘か判断するのがむずかしい場合がある点である。以上 Kurrelmeyer (1900: 58ff.), Erben (1961) に基づいた3つのドイツ語勧誘表現の歴史的な経緯と問題点である。

ところで, ドイツ語の命令・要求表現の歴史的な変遷を見るため, 中高ドイツ語, 初期新高ドイツ語, 現代ドイツ語と時代的に命令文を調べたことがあった¹⁰⁾。その際に勧誘表現の実例も同時に調べてみた。紹介した Erben の記述, 特に歴史的な経緯にこれらの実例が相応するかみてみよう。調べた作品は次のものである。1. ハルトマン・フォン・アウエ『哀れなハイネリヒ』1195年, 2. ヨハネス・フォン・テーブル『ボヘミアの農夫』1400年頃, 3. 『ティル・オイレンシュピーゲル』1510年, 4. ハンス・ザックス『散文対話』1524年, 5. グリンメルスハウゼン『阿呆物語』(一部) 1669年, 6. ローエンシュタイン『クレオパトラ』(一部) 1689年, 7. レッシング『ミンナ・フォン・バルンヘルム』1767年, 8. レッシ

ング『賢者ナータン』1779年, 9.ハインリヒ・フォン・クライスト『こわれがめ』1808年, 10.フリードリヒ・ヘッベル『マリア・マクダレーナ』1844年, 11, 12.シュニツラー『アナートル』1898年, 『輪舞』1900年である。

『哀れなハインリヒ』と『ボヘミアの農夫』は12～14世紀で, 中高ドイツ語や初期新高ドイツ語の初期のものになる。以下のようにそれぞれ一箇所勧誘表現があったが, 二つとも～en wir! タイプである。

(19) *nû verswîgen wir aber der nôt* (*Der arme Heinrich* 756, S.54)

さてそのような貧困のことは言わないでおきましょう。

(20) *Reyt wir engegen, enbiet vnde sag wir lob vnde ere dem Tode,*

死を迎え, 死に称賛を伝え, 死に敬意を表そう。(*Der Ackermann*, S.36)

Horváth (2003: 262) は, ハルトマン・フォン・アウエの『イーヴェイン』から2例 (*nû bite wir si beide* (2279) (さあ, 二人で願いましょう), *nû gân wir zuo den liuten hin* (2363) (家来たちのそこへ行きましょう) を引用しているが, やはり～en wir! タイプである。これらから～en wir! タイプは中高ドイツ語の勧誘表現の典型的な形式であると言えよう。

16世紀の初期新高ドイツ語に関してはすでにルターの『聖書』でいかに *lass(t) uns~!* タイプが多いかをみた。同時代のハンス・ザックスの『散文対話』を見ても, やはり多くは *lass(t) uns~!* タイプである (Horváth (2003: 262) 参照)。

(21) *Wenn wir Futter und Deck haben, so laßt uns benügen.* (Hans Sachs: *Prosadialoge*, S.39)

もし食べ物と家があれば, それで満足しよう。

また17世紀のグリンメルスハウゼンの『阿呆物語』やローエンシュタインの『クレオパトラ』では *lass uns~!* タイプと *wollen wir~!* タイプで, 調べた限りでは～en wir! タイプは現れない。これも *Erben* の記述と合致する。

(22) ... *jetzt wollen wir probieren, welcher den andern am besten agieren wird können.*

(Grimmelshausen, *Simplicissimus*, S.142)

どちらが化し合いに勝つか, ゆっくりと見物することにしましょう¹¹⁾。

(23) *Herr Vater wollen wir ja sterben, ...Laß' unsern Todfeind uns durch unsern Stahl versehen!*

(Lohenstein: *Cleopatra*, S.110)

父上, 死にましよう, …宿敵を剣でやっつけてやりましよう。

そして18世紀のレッシングになると～en wir! タイプも現れ, すべてのタイプが頻度の違いはあれ使われ始める。18世紀から現代までの例をみてみよう。

(24) *Und dann, so gehn wir.* (Lessing: *Nathan der Weise*, S.87)

それから一緒に行きましょう。

(25) *Komm, lass uns hier durch diesen Tempel ... gehn!* (Lessing, a.a.O., S.142.)

さあ、この教会の中を歩いて行きましょう。

- (26) Herr Schreiber Licht, **laßt uns** die Spur ein wenig doch verfolgen. (Kleist: *Der zerbrochene Krug*, S.67)

書記のリヒトさん、少し跡を追ってみましょう。

- (27) **Wir wollen** sehen, wer Recht hat! (Hebbel: *Maria Magdalena*, S.88)

だれが正しいか見てみようじゃないか。

- (28) So **gehn wir** zurück, wo Leute sein. (Schnitzler: *Reigen*, S.15)

さあ、人のいるところへ帰りましょう。

調べた限りでは、レッスンでは 5 例中、～en wir! 2 例, lass(t) uns～! 3 例, wir wollen～! 0 例, クライストでは lass(t) uns～! タイプが 1 例だけ, ヘッベルでは 4 例中, ～en wir! 0 例, wir wollen～! 4 例, lass(t) uns～! 0 例, シュニツラー 2 作品では 17 例中, ～en wir! 7 例, wir wollen～! 10 例, lass(t) uns～! 0 例である。ただしシュニツラーの『アナートル』では wir wollen～! タイプが 11 例中 9 例と圧倒しているが、『輪舞』では～en wir! タイプが 6 例中 5 例と圧倒している。中高ドイツ語では～en wir! タイプ, 初期新高ドイツ語では lass(t) uns～! タイプが主流, 17 世紀には lass(t) uns～! タイプに加え wir wollen～! タイプもよく用いられ, 18 世紀からは 3 つのタイプが現れるという Erben の記述と調べた実例はほぼ一致していると言える。

III. 3 つのタイプの使用頻度と Joint action 以外の用法など

このようにドイツ語には勧誘表現に 3 つの形式があることにより, その使用法の相違と使用頻度が問題になる。使用法に関しては, Hindelang (1978) のように使い分けに言及する研究者もいるが, Ulvestad (1985) はそのつど反例をあげている。例えば, Hindelang (1978: 472f.) には, 話し手と聞き手がすでに以前共同で行ったことがあることをまた勧誘する際 lass uns～! が使われる, といった記述があり, それに対して Ulvestad (1985: 522) では „...laß uns heiraten!“ (結婚しようよ!), „Laß uns Brüderschaft trinken“ (兄弟の契りを交そう!) という (すでに行ったことがあるとは考えられない) 実例をあげ, 反論している。「行こうか!」が Gehen wir!, Wir wollen gehen!, Lass uns gehen! と 3 つの形式で表されること, またすでに見たようにルター訳『聖書』が lass(t) uns～! 形式で書かれているのに, 統一訳では wir wollen～! で訳されていることから, 厳密な使い分けはないと言えるのではないか。Ulvestad (1985: 523) のように, 3 つの表現に使用の任意性 (Fakultativität) を認めるのが正しいかもしれない。Erben (1961: 470) はヴァリエーションとして 4 つのタイプに触れている。

1. 簡潔で, 命令的な Gehen wir!

2. 丁寧, 親密に (höflich-vertraulich) 同意を求める Laßt uns gehen!
親密に (vertraulich) 同意を求める Laßt uns gehen! (Erben (1983a: 52f.))
3. 恭しく (feierlich-beschwörend) 懇願する Lassen Sie uns gehen!
丁寧 (höflich) 懇願する Lassen Sie uns gehen! (Erben (1983a: 52f.))
4. 決定し, 共同の意志を提案する要求形式の Wir wollen gehen!

Ulvestad (1985: 524) は, Erben が1961年と1983年で2と3が変化していること, 4では beschließen (決定する) と vorschlagen (提案する) は形容矛盾と批判するが, Hindelang のような使い分けより, 使用の任意性を認めたヴァリエーションとして捉える方が好ましいとしている。確かに, すでに触れたように使う動詞による使い分け(再帰動詞では lass uns~! を避ける)はあっても, 語用論的に厳密な使い分けはないのではないか。ただ, Ulvestad (1985: 530f.) は, 話し手と聞き手が平等である~en wir! タイプ(民主的な勧誘表現 demokratischer Adhortativ) に対して, wir wollen~! タイプは語り手に優位があり, 権威的な勧誘表現 (autoritärer Adhortativ) と呼んでいる。例えば Eventualitäten wollen wir gar nicht denken. (不測の事態などまったく考えないでおこう。) にみられる強い否定副詞 gar nicht は~en wir! や lass(t) uns~! タイプには現れないとのことである。また, lass(t) uns~! タイプは, 家族など親密な関係の間で用いられることが多く, これらのことは外国人のドイツ語教育においても配慮されるべきこととしている。

3つの表現の使用頻度に関しては, Erben (1961), (1983) と Matzel/Ulvestad (1978), Ulvestad (1985), Matzel/Unvestad (1985) において論争がある。Erben (1961) は3つの勧誘表現のうち現代で最も使用頻度が高いものは wir wollen~! タイプであるとした。それに対して Matzel/Ulvestad (1978) は現代の文学作品を中心に2000例の実例を調べ, 最もよく使われるものは~en wir! タイプであるとした。Matzel/Ulvestad (1978) の実例の割合は, 1. ~en wir! 66%, 2. wir wollen~! 15%, 3. lass(t) uns~! 19% である¹²⁾。これに対して Erben (1983a) は, 二人の学生の援助のもと645例を調べると, 1. ~en wir! 200例, 31%, 2. wir wollen~! 282例, 43%, 3. lass(t) uns~! 163例, 25% となり, 1961年の自分の内容が正しいことが確認されたとした。このうち70例はルター訳の『聖書』からのものであるため, 現代の使用頻度をみるためそれらを引き575例で調べると 1. ~en wir! 200例, 35%, 2. wir wollen~! 278例, 48%, 3. lass(t) uns~! 97例, 17% となる。Erben (1983) と Matzel/Ulvestad (1978) では, lass(t) uns~! タイプでは, ほぼ同じ頻度 (17%と19%) でありながら, 1と2のタイプに関しては大きな不一致がある。Ulvestad (1985) は Erben の調査そのものは疑われないが, 以下の点を批判的に指摘している。まず Erben の使用したテキストが19, 20世紀のパンフレット, 政治的な演説, 物語や新聞の抜粋で, 今日のドイツ語の信頼できる結果とするにはテキストが異質(レトリック的色彩をおびたもの)であるうえ, 調査例が少なすぎる

とする。さらに wir wollen～! タイプの勧誘表現としての基準が曖昧であると批判する。lasst uns～! が勧誘の形式として明らかであるのに対して wir wollen タイプは一義的に勧誘ととれない場合がある。例えば Erben があげている Wir wollen vns selbs neeren vnd kleiden, las vns nur nach deinem namen heissen. (Jes. 4, 1) などコンテキストなしでも勧誘的とはされず、1976年のヘルムート・シュミットの演説の一節 Wir Sozialdemokraten wollen weiterarbeiten. も勧誘表現とは言えないとする。Ulvestad は、自分たちが明確な勧誘表現のみを選んで調査しているのに対して、Erben は勧誘表現とは言えない例も含めている、という批判である。

さて、それらを踏まえて Ulvestad (1985) は改めて、明確な場合のみを対象に 4422 例を調べた。これらはすべて小説の会話や戯曲などで、その結果は 1. ~en wir! 2889 例, 65%, 2. wir wollen～! 839 例, 19%, 3. lass(t) uns～! 695 例, 16% である。Ulvestad はさらに推理小説 110 例, 米語のドナルド・ダックの翻訳 118 例, 日常言語 118 例などを調べているが、翻訳では 1. ~en wir! 81 例, 74%, 2. wir wollen～! 5 例, 4%, 3. lass(t) uns～! 24 例, 22%, 日常会話では 1. ~en wir! 80 例, 68%, 2. wir wollen～! 38 例, 32%, 3. lass(t) uns～! 0 例, 0% となっている。推理小説の場合も含め、すべてにおいて ~en wir! タイプが最もよく使われていることがわかる。ここで興味深い特徴としては、翻訳では wir wollen～! タイプがあまり使われていないこと、日常会話では lass(t) uns～! のタイプがまったく使われていない点である。

Matzel/Unvestad (1985) は、上記以外でも 3 つ点で Erben の記述を批判している。1. Laßt uns abhauen! (ずらかろう!), Beten wir! (祈ろう!) が資料に見い出せなかったが、これは資料に偶然なかったのではなく、教会言語やルターの言語使用の影響ではないか (Erben (1961: 410), (1983a: 52)), という Erben に対して、もっと大きな資料でみれば, Laß uns abhauen! (Bredow), Hoffen wir zu Gotte. Beten wir darum. (Horster) などいくらかでも出てくるという指摘。2. 20 世紀の資料においては lass(t) uns～! タイプが支配的なものほどこにもない (Erben (1961: 410), (1983a: 52)) という Erben に対して、そんなことはなく Horbac, Knief, Remarque などの作品には Lass(t) uns～! タイプが他の勧誘表現より多用されているという指摘¹³⁾。3. 英語翻訳では wollen による勧誘表現が好まれる (Erben (1983: 410)) に対して、ドナルド・ダックの例でもそうであるように英語から翻訳された文学もオリジナルがドイツ語の文学においても gehen wir! タイプが最も使われることにはかわりないという批判である。

Erben より 8 倍近い例文数、翻訳や口語など様々なテキストからの分析、そして明確に勧誘表現のみを調査した Ulvestad (1985) の方が現代のドイツ語の勧誘表現の使用頻度をより適切に示していると言えよう。個人的な経験からも日常言語では wir wollen～! タイプよりも、~en wir! タイプの勧誘表現を聞くことも、使うことも多かった。

さて、このような勧誘表現は英語では Let's-imperatives である。Takahashi (2009) によれば、ドイツ語の場合と異なり、英語で問題となっているのは以下のような点である。

1. Joint action 以外、聞き手のみの要求の場合や、話し手のみの要求はどのようなもので、どのくらいの頻度で現れるのか。
2. Let's-imperatives のあとに返答がどのくらいあるのか。
3. Let's-imperatives のあとどのような動詞がくるのか、条件的命令文が可能かなど。

今まであげたドイツ語の研究においては、上記のような点はあまり問題になっていない。それでも 1. に関しては Bosmanszky (1976: 125), Matzel/Ulvestad (1978: 147), Ulvestad (1985: 526) が簡単に触れている。例えば Ulvestad (1985) は、聞き手に対する要求だけの例として医者患者に述べる以下のような例をあげている。

(29) So, heute **wollen wir** mal aufstehen.

さあ、今日は起きてみましょう。

また、話し手だけに対する要求の例として次のようなモノローグ例をあげている。

(30) Na, **sehen wir** mal nach.

まあ、ちょっと確かめてみよう。

今回は、今までに例文にあげたものも含め、文学作品の会話文を中心に 100 例あまりのドイツ語の勧誘表現の例文を収集した。あまり多い例文数ではないが、勧誘表現にどのような動詞が用いられるのか調べると、圧倒的に多いのが **gehen** の 20 例（～en wir! タイプ 11 例, wir wollen～! タイプ 2 例, lass(t) uns～! タイプ 7 例）であった。それに続くのは少し離れて **sehen** 6 例, **fahren** 5 例, **essen** 5 例などであった。日常会話における勧誘や提案であることを考えれば、コルプス（資料体）をさらに増やしてもこれらの動詞はやはり上位にランクされるであろう。

また勧誘表現は了解を前提としていることが多く、勧誘表現のあとにその返答がくることはそれほど多くないと言われる¹⁴⁾。収集した例文でも勧誘に関する返答のあるものは多くないが、少し興味深く感じられたのはシュニツラーの戯曲では、勧誘表現のあとにしばしば勧誘に乗らないような返答がくる。例えば

(31) Anatol: **Wir wollen** im Park spazierengehen. (Schnitzler: *Anatol*, S. 47)

Emilie: Wird es nicht zu kalt sein...?

アナトール: 公園を散歩しよう。

エミーリエ: 寒すぎない?

また勧誘表現も条件文をつくることもある。

(32) Komm, **lasst uns** ihn töten, so wird das Erbe unser sein! (*Markus*, 12. 7., S. 58 [例(6) 参照])

さあ、彼を殺そう、そうすればあの財産はわれわれのものになる。

(33) **Laß uns** weg, ich falle sonst um und ersaufe. (Remarque: *Im Westen nichts Neues*, S.213)

ここから抜け出よう、さもないと俺は倒れて溺れてしまう。

さらに～en wir! タイプでは, lassen wir～! (～をやめにしよう), sagen wir (そうだなあ), Nehmen wir an (～だとしてみよう)などは決まった言い方 (Sequenzen) である。例えば、トーマスが妹の二度目の結婚式についての提案である。

(34) **Lassen wir** den Pomp. (Th. Mann: *Buddenbrooks*, S.355f.)

派手なことはやめにしよう。

まとめ

ドイツ語の勧誘表現に関しては、3つの形式があること以外わが国では今まで詳しく扱われることがなかった。そこでゴート語や古高ドイツ語から現代ドイツ語までの3つの形式の使用の歴史、また勧誘表現としての問題点を Kurrelmeyer (1900), Erben (1961), Ulvestad (1985) などの研究を中心に紹介するとともに、筆者が中高ドイツ語から現代ドイツ語の文学作品から収集した例文をあげ、それが Erben (1961) で述べられている使用の歴史とほぼ合致することを確認した。

また3つの形式に明確な使い分けがあるわけではないが、～en wir! タイプが話し手と聞き手が平等であるのに対して、wir wollen～! タイプは—— Ulvestad によれば——語り手にやや優位がある、また、lass(t) uns～! タイプは、家族など親密な関係の間で用いられることが多い。さらに Erben と Ulvestad との論争から、現代における3つのタイプの使用頻度 (～en wir! タイプが65%で最も頻繁に用いられる) に触れるとともに、英語圏の研究を参照に Joint action 以外、聞き手のみの要求、話し手のみの要求がドイツ語でもあるか、また勧誘表現のあとの返答や勧誘表現にどのような動詞がよく用いられるかなどについても簡単に考察した。日常言語のコルプスに基づいたドイツ語勧誘表現のより詳しい調査、研究は今後の課題としたい。

Während meines Forschungsaufenthaltes beim FRIAS (Freiburg Institute for Advanced Studies) als Fellow 2015/16 habe ich mich mit diesem Thema beschäftigt. Ich möchte dem FRIAS bei dieser Gelegenheit meinen Dank für die wissenschaftliche Hilfe aussprechen,

註

1) ゴート語の勧誘表現に関しては Erdmann (1886: 3), Kurrelmeyer (1900: 58), Braune/Eggers (1987:

- 264) など参照。現代ドイツ語訳は Köbler (2014) を参考にした筆者によるものである。またこのゴート語訳聖書の数奇な運命に関しては、小塩節『銀文字聖書の謎』新潮社、2008年参照。
- 2) 古高ドイツ語の勧誘表現に関しては Erdmann (1886: 3), Kurrelmeyer (1900: 58), Behaghel (1924: 229f.), Erben (1961), Braune/Eggers (1987: 263f.), Simmler (1989: 658f.) など参照。Otfried の訳は Kelle の現代ドイツ語訳に基づいている。なお、Braune/Eggers は Otfried では直説法が用いられているが、古高ドイツ語では勧誘表現に 1 人称複数の接続法が用いられるようになることを指摘している。
 - 3) 中高ドイツ語に関しては Erdmann (1986: 3) から例文を借用している。また、Behaghel (1924: 229f.), Erben (1961), Horváth (2003: 262f.) など参照。
 - 4) *lass uns*〜! は 2 人称単数, *lasst uns*〜! は 2 人称複数に対する勧誘表現である。
 - 5) 4 つの『福音書』には同じ出来事を語る場合があり、ルター訳聖書では、その際同様に *lass(t) uns*〜! タイプの勧誘表現が用いられている。
 - 6) Ulvestad (1985: 518) では、適宜なコンテキストにおいては、同様に話し手を含んだ要求になるものとして 1) 直説法現在, 2) *sollte*, 3) *werden* を使った例をあげている。
 - 1) *Wir lesen* zuerst den letzten Brief. (最初に最後の手紙を読もう。)
 - 2) *Wir sollten* zuerst den letzten Brief lesen.
 - 3) *Wir werden* zuerst den letzten Brief lesen.
 - 7) 以下は Kurrelmeyer (1900: 58f.) を踏まえた Erben (1961) の記述の大まかな紹介である。
 - 8) Ulvestad (1985: 520) は注で、*wollen* 以外にも *lass uns*〜! タイプも可能とする、さらに副文が前に来ても明らかに勧誘表現の場合もあるとして以下の例をあげている。

„Solange du hier bist, **laß uns** gut zueinander sein“ bat sie.
 「あなたがここに在る限り、仲良くやってみましょう！」と彼女は頼んだ。
 - 9) 呼称代名詞 (Anredepronomen) の変遷に関しては高田 (2011) など参照。
 - 10) 拙稿「敬称の命令・要求表現の歴史の変遷について」『ドイツ文学研究』第49号 日本独文学会東海支部 (2017年10月予定)。
 - 11) グリンメルスハウゼン『阿呆物語』望月市恵訳 岩波文庫 (上) 1986年 177ページ。
 関口存男訳『阿呆物語』(関口存男著作集 翻訳・創作 2, 三修社 1994年, 216ページ) では「どつちが役者がいちまいうわてだか、いまにわかってくるでしょう。」と未来の用法に訳されている。すでに見た *wir wollen*〜! タイプの判断のむずかしい点とも言える。
 - 12) Matzel/Ulvestad (1978: 158f.) では、最も頻繁に用いられるのが *~en wir!* タイプ、次に *lass(t) uns*〜! タイプ、第 3 が *wir wollen*〜! タイプという順位の記述だけで、具体的な割合に関しては Ulvestad (1985: 531) の注 5 に記されている。
 - 13) レマルクの『西部戦線異状なし』における命令表現を調べたことがあったが、やはり勧誘表現は確かに *lass(t) uns*〜! タイプだけであった。
 - 14) Takahashi (2009) は、英語の小説の例で一般に言われている以上に勧誘表現に返事があることを指摘している。

使用テキスト

- Das Neue Testament in der deutschen Übersetzung von Martin Luther, Band 1 Text in der Fassung des Bibeldrucks von 1545, Stuttgart (Reclam), 1989. Die Bibel, Nach der Übersetzung Martin Luthers. Mit Apokryphen, Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft), 1999. [統一訳] Die Bibel Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift, Stuttgart (Verlag Katholisches Bibelwerk GmbH), 2016.
- Das Nibelungenlied*, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, Stuttgart (Reclam), 2015. 『ニーベルンゲンの歌』前・後編 (相良守峯訳) 岩波文庫 1988年
- Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus*, Stuttgart (Reclam), 2012.
- Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*, Stuttgart (Reclam), 2013.
- Hartmann von Aue: *Iwein*, Stuttgart (Reclam), 2015. ハルトマン・フォン・アウエ 『ハルトマン作品集』(平尾浩三他訳) 郁文堂 1982年
- Hebbel, Friedrich: *Maria Magdalena*, Stuttgart (Reclam), 2012.
- Kleist, Heinrich von: *Der zerbrochne Krug*, Stuttgart (Reclam), 1977.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*, Stuttgart (Reclam), 2015.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm*, Stuttgart (Reclam), 1977.
- Lindow, W. (Hrsg.): *Ein kurzweilig Lesen von Dil Ulenspiegel*, Stuttgart (Reclam), 2010.
- Lohenstein, Daniel Casper von: *Cleopatra*, Stuttgart (Reclam), 2008.
- Mann, Thomas: *Buddenbrooks Verfall einer Familie*, Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag), 1996.
- Otfrids Evangelienbuch, Herausgegeben von Oskar Erdmann, besorgt von Ludwig Wolff, Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1973, Christi Leben und Lehre besungen von Otfrid, aus dem althochdeutschen übersetzt von Johann Kelle, Prag 1870.
- Remarque, Erich Maria: *Im Westen nichts Neues*, Köln (KiWi), 2016.
- Sachs, Hans: *Prosadialoge*, Berlin (Holzinger), 2013.
- Schnitzler, Arthur: *Anatol, Anatols Größenwahn, Der grüne Kakadu*, Stuttgart (Reclam), 1989.
- Schnitzler, Arthur: *Reigen*, Stuttgart (Reclam), 2014.
- Tepl, Johannes von: *Der Ackermann*, Stuttgart (Reclam), 2009.
- ** 上記以外でも邦訳があるものは参照させていただいた。

参考文献

- Behagel, Otto (1924): *Deutsche Syntax Eine geschichtliche Darstellung*, Band II, Die Wortklassen und Wortformen, Heidelberg.
- Bosmanszky, Kurt (1976): *Der Imperativ und seine Stellung im Modalsystem der deutschen Gegenwartssprache. Untersuchungen über Ausdrucksmöglichkeiten der Aufforderung*, masch. Dissertation Wien.
- Braune, Wilhelm/Eggers, Hans (1987): *Althochdeutsche Grammatik*, Tübingen.
- Curme O. George (1977²): *A Grammar of the German Language*, New York.
- Ebert, R. P./Reichmann, O./Solms, H-J./Wegera, K-P. (1993): *Frühneuhochdeutsche Grammatik*, Tübingen.
- Erben, Johannes (1980¹²): *Deutsche Grammatik. Ein Abriss*, München.

- Erben, Johannes (1961): Lasst uns feiern/Wir wollen feiern! In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur E. Karg-Gasterstädt zum 75. Geburtstag*, PBB 82 Sonderband, S. 459–471.
- Erben, Johannes (1983a): Zu den Ausdrucksvarianten des „Adhortativus inclusivus“ („inclusive/Joint imperative“) im Neuhochdeutschen, In: John Ole Askedal/Christen Christensen/Ådne Findreng/Oddleif Leirbukt (Hrsg.), *Festschrift für Lauritz Saltveit zum 70. Geburtstag*, Oslo/Bergen/Tromsø, S.50–57.
- Erben, Johannes (1983b): Sprechakte der Aufforderung im Neuhochdeutschen, In: *Sprachwissenschaft* 8/4 , S.399–412.
- Erdmann, Oskar (1886): *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung*, Erste Abteilung, Stuttgart.
- Fries, Norbert (1983): *Syntaktische und semantische Studien zum frei verwendeten Infinitiv und zu verwandten Erscheinungen im Deutschen*, Tübingen.
- Fries, Norbert (1992): Zur Syntax des Imperativs im Deutschen, In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 11(2), S.153–188.
- Hindelang, Götz (1978): *Auffordern. Die Untertypen des Aufforderns und ihre sprachlichen Realisierungsformen*, Göttingen.
- Horváth, Katalin (2003): Aufforderungssatztypen vom Mittelhochdeutschen bis zum frühen Neuhochdeutschen – eine Fallstudie. In: *Jahrbuch der ungarischen Germanistik 2003*, Bonn-Budapest, S.249–265.
- Köbler, Gerhard (2014): Gotisches Wörterbuch (4. Aufl.). <http://www.koeblergerhard.de/gotwbhin.html>
- König, E./Siemund, P. (2007): Speech act distinctions in grammar, In: Shopen, T. (Hg.), *Language typology and syntactic description Vol. 1: clause structure*, Cambridge, pp. 276–324.
- Kurrelmeyer, William (1900): *The historical development of the types of the first person plural imperative in German*, Strassburg.
- Matzel, Klaus/Ulvestad, Bjarne (1978): Zum Adhortativ und Sie-Imperativ, In: *Sprachwissenschaft* 3, S.146–183.
- Matzel, Klaus/Ulvestad, Bjarne (1985): Ergänzendes zu zwei früheren Veröffentlichungen, In: *Sprachwissenschaft* 10, S.1–6.
- Paul, Hermann (1958⁴): *Deutsche Grammatik*, Band IV, Halle (Saale) .
- Simmler, Franz (1989): Zur Geschichte der Imperativsätze und ihrer Ersatzformen im Deutschen, In: *Festschrift für Herbert Kolb zu seinem 65. Geburtstag*, (Hg.). Klaus Matzel und Hans-Gert Roloff, Frankfurt am Main, S.642–691.
- Suzuki, Yasushi: Die Aufforderungsausdrücke von „lassen“ (Manuskript).
- Takahashi, Hidemitsu (2009): *Let's – imperatives in Conversational English*, In: *Journal of the Graduate School of Letters*, Hokkaido University, Vol. 4, pp. 22–36.
- Ulvestad, Bjarne (1985): Die kanonischen deutschen Adhortative im Auslandsdeutschunterricht, In: Georg Stötzel (Hg), *Germanistik, Forschungsstand und Perspektiven*, 1. Teil, Germanistische Sprachwissenschaft, Didaktik der Deutschen Sprache und Literatur, Berlin/New York, S.518–534.
- 古賀允洋 (1979) : 『演習 中高ドイツ語文法』 大学書林。

- 千種眞一 (1989) : 『ゴート語の聖書』 大学書林。
- 千種眞一 (1997) : 『ゴート語辞典』 大学書林。
- 工藤康弘・藤代幸一 (1992) : 『初期新高ドイツ語』 大学書林。
- 鈴木康志 (2007) : 「ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について—『ブデンプロック家の人々』を例として—」『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第17号 49~71 ページ。
- 鈴木康志 (2008) : 「ドイツ語話法の助動詞による命令・要求表現」『言語と文化』 第19号 1~20 ページ。
- 鈴木康志 (2010) : 「lassen による命令・要求表現」『言語と文化』 第23号 17~33 ページ。
- 鈴木康志 (2017) : 「ドイツ語の条件的命令文について」『言語と文化』 第36号 29~44 ページ。
- 鈴木康志 (2017) : 「敬称の命令・要求表現の歴史の変遷について」『ドイツ文学研究』 第49号 日本独文学会東海支部 (10月予定)。
- 高田博行 (2011) : 「敬称の筈に踊らされる熊たち 18世紀のドイツ語呼称代名詞」高田・椎名・小野寺 (編著) 『歴史語用論入門』 大修館書店 143~162 ページ。
- 高橋輝和 (1994) : 『古期ドイツ語文法』 大学書林。
- 鷺野亜紀 (2015) : 「日英語における勧誘表現の叙事的な機能について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 第39号 195~211 ページ。